

「統一思想の観点からみた脳の構造と機能

～潜在記憶の解放に関して」

鈴木 重裕、 Ph. D., M. D.

日本 札幌家庭クリニック医師

序論

人間の心身両面の健康を外敵から守り、さらには健康をより高めていくのに重要な役割を果たしているのは、睡眠、食欲、体温中枢などの集まる間脳を中心とした脳の働きであると言ってよい。しかし、心身両面において様々な病気が存在するということは、間脳を中心に脳が本来の機能を十分に果たしていないということでもある。その原因は一体、何であろうか。その原因を一言で言えば、それは「記憶」なのである。

記憶は、記銘、保持、想起の三つのプロセスよりなるが、記憶には想起意識を伴う「顕在記憶 (explicit memory)」と想起意識を伴わない「潜在記憶 (implicit memory)」がある。意識して活用できる顕在記憶にはエピソード記憶と意味記憶があり、一方、意識して活用できない潜在記憶には、身体運動、条件反射や、先行した刺激が後続の刺激の処理に促進効果を及ぼす「プライミング現象」などが関与する。

従来の研究によると、記憶は脳の至るところに、さらには身体の細胞一個一個に至るまで分散されているが、担当する領域が定まっている記憶機能があることも事実である。顕在記憶は主に海馬と大脳皮質などの新しい脳に蓄積され、潜在記憶は大脳基底核や扁桃核、小脳などの古い脳に蓄積されるとしている。また、私たちの潜在意識は、宇宙が創生されてからすべての記憶にアクセスして、瞬時にして膨大な記憶を立ち上げていると言う。私たちが認識しているのは顕在意識であるが、その 100 万倍の記憶が 1 秒間のうちに潜在意識の中で立ち上がっているのである。つまり、記憶全体からみると顕

．．．．．
在記憶は氷山の一角であり、記憶のほとんどが潜在記憶であると言ってよいだろう。実は、その潜在記憶が、人間の言動や行動に多大の影響を与えているのである。

ところで、間脳を中心とする脳は潜在意識と深い関係がある。潜在意識の中に潜在記憶が存在するが、その中で悪影響を及ぼし続ける否定的な記憶が問題である。その記憶とは、消したくても消し去ることのできない苦痛を伴った過去における忌まわしい記憶であり、これが心に棘のように突き刺さっていると心は痛みを感じ否定的感情が湧いてくる。さらにその痛みを耐えきれなくなるとそれは怒りに変わり、他人もしくは自分を責め、傷つける。しかもそれですべてが終わるのではなく、新たな悲劇を伴う、さらなる記憶を作り出すことになる。その結果、病気を発生させる負のスパイラルが引き起こされ、病気に陥ってしまうのである。

それでは、それを解決するためにはどのようにしたらよいのであろうか。

統一思想の観点からみた脳の構造と機能を念頭に置きながら、潜在記憶の解放について医学的観点から考えてみたいと思う。

本論

よく知られているように、人間には DNA (Deoxyribonucleic acid:デオキシリボ核酸) が存在するが、自分の DNA は、自身が生まれた時に初めて作られたものではなく、それは親から与えられたものである。親もまた、その親から DNA を引き継いできた。つまり、自分の中には先祖、さらには人類始祖の DNA までもが存在しているのである。そこで最初に、DNA と潜在記憶の関係について述べてみたい。

従来から様々な研究がなされてきたが、利根川 (1939～) が免疫機構において遺伝子を再構成し、その遺伝子が多種多様な抗体を作り出していることを発見したことは極めて重要である (Tonegawa, 1987)。これは、遺伝子は両親の遺伝子を受け継いでいるが一生不変であるということはない、という内容を示唆するものである。

また、最近の DNA のメチル化を含むエピジェネティクス (epigenetics)、これはまったく同じ遺伝子型を持つ細胞であっても様々な細胞に分化して

いくことを研究する学問のことであるが、このエピジェネティクスな遺伝子変化の研究結果からも、先祖から DNA に継承された記憶の影響を否定することはできない、ということが実証されつつある。

つまり、多細胞生物の体細胞では、核内の DNA の塩基配列と関係なく、後天的な作用、例えば栄養分やストレスなどの感情によって、DNA や DNA 分子と結合しているタンパク質に化学的変化が生じて遺伝子の発現が制御される。その結果、細胞の性質が変化し、細胞分裂を経ても、しかもその変化は DNA が二重らせんによって次世代に受け渡されるのと同様に、確実に世代を超えて受け継がれるということなのである (Reik & Walter, 2001; Surani, 2001)。このエピジェネティクスな現象は、DNA の塩基配列の変化のみが遺伝形質の変化を引き起こすとするセントラル・ドグマ、すなわち、ダーウィン仮説では説明できない (Lipton, 1977a: 1977b; Jablonka & Lamb, 1995)。

これは統一思想の立場を裏付けることになる。つまり、統一思想は原相の二性性相の理論に基づいているが、これによると、すべての存在は性相と形状の二性性相を持っており (UT, 43)、DNA も心的要素と物質的要素から構成され、そこには心理作用と生理作用が並行して行われることになるからである。さらに、統一思想では記憶を「認識に際して主体があらかじめ持っている観念や概念」と定義しているが、特に潜在記憶においては、根源的には DNA の分子配列との関連があると見ていた (Lee, 1985)。この点についても多くの

DNA のエピジェネティクスな現象がそれを証明しつつあることは、既に述べてきた通りである。以上の点から、過去の経験による「記憶」という心的要素が DNA そのものの生理作用の変化をもたらし、同様にその生理的变化が人間の心的変化をもたらして来たことは想像するのに難くない。

従って、先祖から伝わる膨大な量の記憶が、DNA を通じて私たちの中に存在していることは十分に示唆されるのである。そして、その記憶の中には、愛されなかったという記憶を中心に、悲しく寂しかった記憶、時には恨んだりもした数々の記憶があり、それが引き金になって否定的な感情が湧き起こってくるのであろうと思われる。その感情をコントロールして平穏な心へと変えていくためには、潜在するこれらの記憶を解放していかなければならない。それでは、記憶を解放すると言うことはどういうことなのであろうか。この点について述べる前に、顕在記憶と潜在記憶の関係について触れてみたいと思う。

顕在記憶は、事実についての知識を符号化することによって得られる。海馬と側頭葉の初期のやり取りが決め手となるこの記憶は、意識の影響を直接受ける。一方、潜在記憶は、一度覚えたら意識しなくてもこなせる技能や習慣を貯蔵したものであるが、大脳基底核、扁桃核、小脳などが関係し、またこの記憶は間脳にも影響を与える。顕在記憶と潜在記憶をつかさどる部位の違いは、最近の多くの研究でさらにはっきり示されつつあるが、相互に関係し合っているのも事実である (Ratey, 2002)。

ところで、記憶に重要な影響をもたらすものは「情動」であり、大脳辺縁系に存在する扁桃体が中心的役割を果たしているとされている。しかし、情動を構成する反応は実に多種多様である。重要な点は次の三つである。

第一は、脳は非常に少数の脳部位から情動を誘発しているということである。主な情動誘発部位は四つあるが、その内の三つが大脳皮質下にある。すなわち、扁桃体、視床下部と前脳基底部、脳幹部であり、これらの間脳レベルのニューロンは、それより上位のいくつかの脳部位に、セロトニン、ドーパミン、モノアミン、ノルエピネフリンという神経伝達物質（脳内ホルモン）を放出し、多くのニューロン回路の作動様式を一時的に変えていく。また、皮質部位には前頭前・腹内側領域がある。

第二は、これらの部位が様々な情動の処理に様々な程度で関わっているということである。例えば、悲しみは前頭前・腹内側皮質、視床下部、脳幹を活性化するが、怒りや恐れは、前頭前皮質も視床下部も活性化しない。脳幹の活性化はこの三つの情動すべてに見られるが、視床下部と前頭前・腹内側皮質の強い活性化は悲しみに特有のものである。

第三は、これらの部位のいくつかは、いくつかの情動を意味する刺激の識別にも関わっているということである。例えば、扁桃体は嫌悪や喜びを識別したり学習したりすることにはほとんど関わりを持っていないが、恐れを識別し、恐れを表現するために必要不可欠であることがわかっている

(Damasio,1999)。

それでは、情動がなぜ、記憶の固定化を増強するのであろうか。それは情動の変化によって生じるホルモンの影響であらうと考えられている。例えば、ストレスを受けると副腎から二種類のストレスホルモンが放出されるが、ストレスが弱い時は副腎皮質からコルチゾールだけが放出され、ストレスが強い時はそれに加えて、副腎髄質からアドレナリンも放出される。コルチゾールは、脳幹の孤束核や扁桃体外側基底核、あるいは大脳皮質に入り込み、記憶の固定化を増強する。またアドレナリンは迷走神経を介して脳幹の孤束核の神経細胞を刺激し、扁桃体内にノルアドレナリンを放出させる。扁桃体内の受容体にノルアドレナリンが結合すると、コルチゾールの作用が強まり記憶の固定化が促進されるのである。その最たるものが **PTSD** (心的外傷後ストレス障害) である。また、この **PTSD** を引き起こす機序から逆に、ストレスホルモンであるアドレナリンの活動をブロックすることによって、**PTSD** の発生が抑制されたり軽減されたりする可能性を示す実験結果も多く見られている。それでは、記憶を含む意識において、顕在意識と潜在意識の関係はどの様になっているのであろうか。

統一思想の観点から言うと、顕在意識は海馬や間脳と連動した大脳皮質の働きを中心とする肉身レベルの意識であると考えられる。一方、潜在意識は生心を中心とする霊人体レベルの意識であると考えられ、実際、この潜在意識は肉心の作用に深く関わる間脳レベルの機能に多大な影響を与えていることがわかっている。さらに、この両者は共鳴し授受作用が生じているが、こ

ここで重要なことは、リベット(1916～2007)らの研究によって脳と顕在意識との関係がはっきりしたことである。つまり、「意志」は行動が始まる約50分の1秒前に現れるが、脳内の波動は、ほぼ確実に「意志」より約30分の1秒前に現れることを彼らは発見した (Libet et. al., 1983; Libet, 1985)。言い換えると、脳の波動は何かをしようとする「意志」を自覚する前に働くことがわかったのである。従って、潜在意識がまず脳を刺激し、その刺激された脳が顕在意識を生じさせ、さらにその顕在意識が「習慣」や「情動」によって潜在意識へ刷り込まれていくという、潜在意識、脳、顕在意識の間にはループが形成されていることがわかる。そして、これによって生前の実体的な記憶が霊人体に刻み込まれていくのだと思われる。以上の点を踏まえ、それでは潜在意識の中に棘とげのように刺さっている潜在記憶を解放するためにはどうすれば良いのであろうか。

前述したように、ストレスホルモンであるアドレナリンの活動をブロックする薬物療法も対症療法としては有効ではあるが、完治させるまでには至っていない。なぜなら、心に痛みを伴うような情動によって固定化された記憶は、痛みとは正反対の癒しの情動によってこそ、真に解放され得ると考えるのが妥当だと思われるからである。心理学的、認知行動療法的側面から今までに癒しのための様々な方法が試みられて来ているが (Vitale, 2008)、注目すべきものに、チョンピョン 清平 (韓国) 修練会における霊性治療がある。

これは、霊的な癒しというよりはむしろ神霊治療とみなされ得るものだが、

悪霊分立と先祖の解怨、祝福役事によってなされる。この神髄は神の真の愛、
み言^{ことば}、悔い改めによって、霊肉ともに真に健康な姿へと実際に導くものである。ここでは、心を集中して祈祷や瞑想を行いながら、リズムに合わせて全身を自分の手で叩く健康打法^{たた}が用いられている。悪霊を分立するこのスタイルは、チャクラを解放、活性化し、浄化するための大切な方法でもあり、その効果は真の愛に包まれることによってさらに高められていく。これによって、否定的な潜在記憶が解放され、その結果、苦痛を伴っていた顕在的な「エピソード記憶」も喜びと感謝に満ちた「意味記憶」へと変化していく、つまり、顕在記憶が質的に転換されていくのだと思われる。

また、この霊性治療は音楽療法の一つとして捉^{とら}えることも可能である。日本音楽療法学会の定義によると、音楽療法とは「音楽のもつ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」とされている。墮落性本性由来の言葉や行動によって人々の心は傷つき病んでいる中で癒しを求める、より多くの人々が音楽療法を受けるようになって来ている。そして、その治療効果も様々な研究によって明らかにされつつある。

しかし、治療法としての音楽療法は未熟であり、解決しなければならない問題点も多い。多くの研究者たちが指摘するように、音あるいは音楽を要素的に分析し分類して客観的な方法論を確立すること、すなわち、治療効果をどのように測定し、またそれをどのようにして評価するのか、さらにはより

効果的な治療モデルを立て、それを類型化して臨床に応用することは「治療」を目的とする音楽療法において急を要するテーマである。

ところで、音楽療法には、「受動的音楽療法」と「能動的音楽療法」の二つがある。前者は、主に音楽を鑑賞することによる心理的効果を狙ったものであるのに対し、後者は実際に楽器を演奏したり歌を歌ったりすることによって、心理的・生理的な治療効果を意図している。これは、音楽に合わせて手を叩いたり、あるいは歌を歌ったりすることが治療の中心となり、そこで使われる楽器は太鼓等の打楽器などを用いるのである。清平チョンピョン（韓国）修練会における霊性治療はまさに後者に相当する。

しかしながら、常時、修練会に参加することは容易なことではない。そこで、修練会に連結でき、なおかつ修練会での効果を高めるための問題解決システムが必要であると思われる。そこで注目すべき方法として、ハワイの伝承ヒーリング「ホ・オポノポノ」を挙げたいと思う。

これは元来、400年前からハワイの人たちに伝わっていた問題解決の方法であるが、＜ホ・オ＞はハワイ語で「目標」、＜ポノポノ＞は「完璧」を意味し、＜ホ・オポノポノ＞は、完璧を目標として「修正すること」もしくは「誤りを正すこと」として捉えることができる。

古代ハワイ人によると、誤りとは過去の痛ましい記憶に汚染された思考から生じるのであり、＜ホ・オポノポノ＞は病気をもたらす痛ましい記憶を解放する方法を提示してくれている。これを現代版にしたものが SITH (Self

Identity Through Ho'oponopono) である。これは、ハワイの伝統医療の専門家で「ハワイの人間国宝」でもあるモナ・シメオーナ女史 (1913~1992) が開発したものであり、ヒューレン (1938~) がそれを普及している。

ヒューレンによると、物事が完璧でなくなるのは、潜在意識の中の過去の否定的記憶が再生されて、現在に投影されるからであるとしている。よって悩みを再生する記憶を消去してゼロに至らしめ、無限の心に対して、「悔悛 (Repentance)」と「許し (Forgiveness)」と「変質 (Transmutation)」を「神聖なる存在 (Divinity)」に請い求めることを主張するのである。言い換えると、否定的な記憶を意識から解放し、潜在意識をクリーニング (浄化) することが重要だとしている。そのための方法とは、次の四つの言葉、すなわち「ごめんなさい」「許してください」「ありがとう」「愛しています」という言葉を用いて、「神聖なる存在」に繰り返し語りかけることなのである。「神聖なる存在」とは神のことだが、ここで重要なことは、私たちの意識の中に「神聖なる存在」が既に存在しているということなのである。「ホ・オポノポノ (SITH)」によって記憶が解放 (消去) されるプロセスは次の六つである (Vitale & Hew Len, 2005)。

第一のプロセスは、顕在意識から潜在意識にクリーニングを通じて記憶消去の要求が届くことである。その要求は該当する記憶を揺らし、変容・消去へと誘^{いざな}うのである。第二のプロセスは、顕在意識から潜在意識に働きかけた記憶の消去要求が、超意識へと上がっていくことであり、第三のプロセスは、

超意識は潜在意識から届いた消去要求を再度吟味し、適切な修正を加え「神聖なる存在」に取り次ぐことである。第四のプロセスは、「神聖なる存在」は超意識から取り次がれた記憶の消去要求を受け取ることであり、記憶を変容させるエネルギーを超意識に放出するのである。

ここで言う「超意識」とは、常に「神聖なる存在」と一体化していて人間の潜在意識と「神聖なる存在」を結びつける役割を果たす意識のことであるとしている。これは統一思想では、まさに「生心」に相当する。生心は、神が臨在される霊人体の中心部分であり、神の本質は心情であるので、生心の本質も心情であるが、生心に神が宿り、そこで神と語りあい、神の創造目的を知ることができるのである。

第五のプロセスは、「神聖なる存在」から放出されたエネルギーが超意識、顕在意識を通して、潜在意識にある該当の記憶に達することである。記憶はこのエネルギーによって中和され、やがてゼロになって消去される。

第六のプロセスは、このゼロ（空）になった空間に「神聖なる存在」から超意識・顕在意識を通してインスピレーションがやってくることである。

以上の六つのプロセスを経て記憶が解放されるのであるが、但し、これが起きるためには一つの前提がある。それは、「顕在意識」「潜在意識」「超意識」の三者が一つになっていることである。そのためには、潜在意識を愛していっく慈しむことが大切だと言う (Vitale & Hew Len, 2005)。

もちろん、このようなホ・オポノポノの考え方は何も新しい考えではない。

仏陀の「色即是空、空即是色」の考え方や、イエス・キリストの「汝の敵を愛しなさい」と言った従来の教えと共通するものである。すなわち、すべての原因は自分の「外」にあるのではなく自分の潜在意識の「なか」にあり、自分の「神聖なる存在」に繰り返し語りかけることを通して、潜在意識の中の記憶(情報)を愛することによってそれを解放(消去)することができるのだとしている (Vitale & Hew Len, 2005)。つまり、これらの四つの言葉は人間の本来の性稟(本性)からのみ発せられる言葉であることを考えると、これらの言葉に人間の本心が共鳴し、心が愛によって満たされ、その結果、苦痛を伴う記憶が解放されていくのであらうと思われる。

「ホ・オポノポノ(SITH)」は、多様な文化的・社会的背景からなる南北アメリカや欧州で実践され、国連、ユネスコ、WHO(世界保健機構)、ハワイ大学など、様々な国際会議や高等教育の場へも紹介されてきた。この有効性は、罪を犯した精神障害者の収容施設で取り組んだ実績 (Vitale & Hew Len, 2005) や、高血圧の治療において顕著な効果をもたらした (Kretzer et. al., 2007) ことでも高く評価されている。

それでは、否定的記憶が解放され、潜在意識がクリーニングされるに従って、最も大きく変わる点は何であろうか。それはインスピレーションによって「自分が本当に願っていること」がはっきりイメージされ、しかも必ず実現するという「実感」が生まれることだと思われる。イメージされていることが実感されると、間脳の働きが中心になってイメージが忠実に「実現され

ていく」のである。

人は誰も「願い」を持っているが、多くの場合はあきらめを伴うことが多い。それはなぜだろうか。その理由は、できないことが既に「実感」されているからなのである。いくらプラス思考しようとして顕在意識を働かせ努力したとしても、潜在意識の圧倒的な力に勝っていくのは容易なことではない。これは、身体や人生をコントロールするには、ただ単に「肯定的に考える」だけでは十分ではないことを意味している。潜在意識の強力なあきらめの実感に対抗しようとしても疲れるだけであり、しかも失敗すればできなかった自分を責めることにもなり兼ねず、さらに、あきらめの実感を強化するだけなのである。つまり、様々な願いがあったとしても、その実感が願いと逆であれば、できないイメージがいつも浮かんでくるために、間脳はそれを「自分の願い」だと錯覚し、その錯覚したことを実現しようとしてしまうのである。肯定的思考を試みて失敗する原因は、「潜在意識」に潜んでいるあきらめの実感に気付かないところにある。

しかし、記憶が解放され、潜在意識がクリーニングされると、「自分の本当の願い」を知ることができ、「できる」という実感が湧いてくる。人間には、「願いが実現されると気持ちいい」と考えた時、実際に行うよりも先に脳内にドーパミン（快楽性をともなう脳内ホルモン）が流れ、その行動に向かわせるという潜在意識の「プライミング現象」が見られるが、この促進効果も手伝って、自分自身が変わり、また、その波動が周りの人間関係にも良い影

響を与えるので、当然、環境も変化することになる。このようにして、「願い」は実現されていくのである。

しかしながら、これらの方法で人間の否定的な潜在記憶が次々に解放されていったとしても、それでも最後まで解決困難な問題が残る。それは統一原理によって明らかにされた内容だが、人類始祖が陥ってしまったサタンとの因縁によって発生した「原罪」(DP, 88-89) という潜在記憶なのである。この問題はサタンとの血縁問題、すなわち血統問題^{から}が絡んでいるため、サタンが屈服しない限りは人間自身の努力とインスピレーションのみでは到底解決できるものではない。従って、全人類においては「真の父母」による「血統転換」が必要であるという結論が得られるのである (HSA-UWC, 2003)。

今回のテーマである潜在記憶の解放に関して最も決定的な影響を与える究極の情動とは何であろうか。それは「真の愛」である。

真の愛とは神の心情の流れのことであり、それは幸福と無形の秩序と公益性を持つ平和の根源であり要である。それとともに、神の意志と力の象徴でもある。真の愛は、生命を犠牲にし、生命を越えて愛する。なぜなら、愛が先だからである。本来、この宇宙が創造されたのは生命のためではなく、愛のためであった。つまり、愛が生命に伴うのではなく、愛に生命に伴うのである (HSA-UWC, 2003)。人類歴史において、真の愛を完成すれば、忌まわしい潜在記憶を解放することができ、政治、経済、文化的問題はもちろん、すべての紛争と葛藤問題もきれいに解決できるであろう。今日、世界人類が抱

えているすべての難問題は、真の愛の完成によってのみ根本的な解決が可能なのである。

この「真の愛」について、最後に、**Rev. Hyung Jin Moon** のスピーチを引用して本論を終えたいと思う。「私たちの歴史は、イエス様からは犠牲の愛、仏教からは慈悲の愛、イスラム教からは絶対忠誠を学んできた歴史であった。しかしながら、『真の父母』は今もなお、地獄に落ちる人々の為に死んで真の愛を与えてくださり、私たちの身代わりに幾度となく死の道を歩んで来られている。『真の父母』の『真の愛』は、人類を天国に導くために幾度も死なれたという愛であり、人類歴史上の最高の愛である。『真の父母』に五大聖人が屈伏したのは『真の愛』のゆえである (H. Moon, 2009)。」

結論

最近の DNA のエピジェネティクスな遺伝子変化の研究結果から、後天的な情動によっても先祖から DNA に継承された記憶の影響を否定することはできず、その影響は確実に世代を超えて受け継がれている、と考えられる。そして、その記憶が引き金になって湧き出てくる否定的な感情をコントロールして平穏な心へと変えていくためには、潜在するこれらの記憶を解放（消去）し、潜在意識をクリーニングしなければならない。特に、否定的記憶の解放

には、「情動」が必要である。

潜在意識の中の潜在記憶を解放するための方法として注目すべきものに、清平（韓国）修練会における霊性治療があり、また問題解決システムとして、ハワイの伝承ヒーリング「ホ・オポノポノ」がある。

否定的記憶が解放（消去）され、潜在意識がクリーニングされるに従って、最も大きく変わる点は、「自分が本当に願っていること」を実感できることである。言い換えると、潜在意識をクリーニングすれば、自分の「本当の願い」を実感するようになるのである。その結果、潜在意識の「プライミング現象」による促進効果も手伝って、「願い」が実現されていく。

しかしながら、これらの方法で人間の否定的な潜在記憶が次々に解放されていったとしても、それでも最終的に解決できない問題がある。それは、人類始祖が陥ってしまったサタンとの因縁によって発生した「原罪」という潜在記憶の問題である。この問題は、サタンの血統が絡^{から}んでいるため、サタンが屈服しない限りは人間自身の努力とインスピレーションのみでは到底解決できるものではない。

従って、全人類においては「真の父母」による「血統転換」が絶対的に必要なのだという結論を得る。そして、潜在記憶の解放に関して最も決定的な影響を与える究極の情動とは、それがまさに「真の愛」なのである。

References

- Damasio, A. (1999). The Feeling of What Happens; Body, Emotion and the Making of Consciousness. VINTAGE BOOKS, London.**
- Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity. (1977). Divine Principle. (English version).New York: HSA-UWC.**
- Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity. (2003). Cheon Seong Gyeong: Selections from the Speeches of True Parents. 「天聖經」 (in Japanese).**
- Jablonka, E. & Lamb, M. (1995). Epigenetic Inheritance and Evolution: The Lamarckian Dimension. Oxford, Oxford University Press.**
- Kretzer, K. et al. (2007). Self Identity Through Ho'oponopono as Adjunctive Therapy for Hypertension Management. Ethnicity & Disease, Vol. 17, Issue 4, September: 624-628.**
- Lee, S. (1985). The End of Communism. UTI.**
- Libet, B. et. al. (1983). Time of conscious intention to act in relation to onset of cerebral activity (readiness-potential). The unconscious initiation of a freely voluntary act. Brain, 106:623-642.**
- Libet, B. (1985). Unconscious cerebral initiative and the role of conscious will in**

voluntary action. Behavioral and Brain Sciences, 8: 529-566.

Lipton, BH. (1977a). A fine structural analysis of normal and modulated cells in myogenic culture. Developmental Biology 60:26-47.

Lipton, BH. (1977b). Collagen synthesis by normal and bromodeoxyuridine-treated cells in myogenic culture. Developmental Biology 61:153-165.

Moon, H. (2009). The Speech of Rev. Hyung Jim Moon on the 24th of July in Kurume.

Ratey, JJ. (2002). A User's Guide to The Brain. Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

Reik, W. & Walter, J. (2001). Genomic Imprinting: Parental Influence on the Genome. Nature Reviews Genetics 2: 21+.

Surani, MA. (2001). Reprogramming of genome function through epigenetic inheritance. Nature 414: 122+.

Tonegawa, S. (1987). Somatic Generation of Immune Diversity. Nobel lecture, December 8.

Unification Thought Institute. (2005). New Essentials of Unification Thought; Head-Wing Thought. Tokyo: UTI-JAPAN.

Vitale, J. (2008). The Key; The Missing Secret for Attracting Anything You Want. Hypnotic Marketing, Inc.

Vitale, J. & Hew Len, I. (2005). Zero Limits: The Secret Hawaiian System for

Wealth, Health, Peace & More. John Wiley & Sons, Inc.